



雨水市民の会

会長 辰濃 和男

〒131-0032 東京都墨田区東向島 1-8-1

TEL : 03-3611-0573 FAX : 03-3611-0574

H.P : <http://www.skywater.jp/>

e-mail : office@skywater.jp

雨水利用技術者セミナー講師・ケーニッヒさんにドイツの雨水利用最前線を聞く

2/7(土) 日独雨水利用ネットワーク会議にご参加ください

2月6日(金)に実施する雨水利用技術者セミナーは、40人の定員をオーバーしたため1月15日で申し込みを締め切りました。インターネットでも募集したこともあって、遠くは奄美大島や広島市など全国各地から申し込みがありました。また、読売新聞や日本建築士事務所協会連合会雑誌、日経エコロジーなどにも掲載されました。

セミナーの準備の方は、ドイツの著名な雨水利用建築士であるクラウド・ケーニッヒさんの原稿を翻訳し、日本の講師である佐藤清・テクノプラン建築事務所代表取締役、岡田誠之・東北文化学園大学教授、小川幸正・大林組エコロジーエンジニアリング部バイオマスグループ長、村瀬誠・墨田区環境保全課主査の原稿と合わせて、印刷作業に入っています。チラシやテキストの表紙は、会員であるイラストレーターの松本真理子さんに素敵なデザインをしていただきました。セミナー当日には160ページ近いすばらしいテキストが完成する予定です。また、今回、当セミナーを後援していただいた墨田区からさまざまな支援を受けました。ここに心からお礼を申し上げます。雨水利用を社会の仕組みにしていくなために、雨水利用の技術者養成は大切な取り組みです。すでに、関西雨水利用を進める

市民の会から、大阪で同種のセミナーを当会と共同で開催したいと打診がきています。今後、この種のセミナーを各地の市民グループと力をあわせ、全国的な取り組んでいく必要があるのではないのでしょうか。

翌日の2月7日(土)には、クラウド・ケーニッヒさんから、ドイツ雨水利用の専門グループであるfbrが実施している、雨水利用技術者セミナーの取り組みやドイツの雨水利用の最新事情についてお話していただく予定です。

2003年度は、ドイツからケーニッヒさんに来ていただいたので、2004年度は、日本から主要メンバーがドイツへ行って、fbrと一緒に日独雨水利用技術者セミナーをという話も出ています。当日、ケーニッヒさんからもドイツから新たな提案があるようですので、ふるってご参加下さい。会議の後には、ケーニッヒさんを囲んで、懇親会も予定しています。(雨水利用技術者講習会プロジェクト)

目次

2 P

ピフル計画いよいよ始動 - 韓国に雨水資料館オープン

3 P

・国連、雨水利用を水戦略に

・次回の国際雨水利用会議、ニューデリーで

・雨水で自治体と事業者が初めての意見交換

4 p

「東本願寺と市民ができること~いのちと自然のこれから~」シンポジウム報告

5 P

風コーナー

・報告：フィールドワーク

「京都の水文化を訪ねて」

・雨と文芸に取り組む

6 P

・あまみず公開セミナー募集！「モンスーンはどうして起こる？」

・事務局からのお願い

・事務局メンバー紹介

日時：2004年2月7日(土)午後2時30分から

場所：国際ファッションセンター会議室

JR 両国駅から徒歩8分。都営大江戸線両国駅から徒歩すぐ。

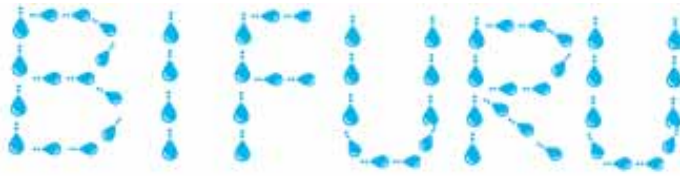
「第一ホテル両国」と同一ビル。電話：03-5610-5800

ホテルと入り口が違うのでご注意を。入口に案内あり。

通訳付き

会費：1,500円





ビフル計画いよいよ始動！

日韓雨水利用交流プロジェクト

韓国に雨水資料館オープン！ 市民の会が招待受ける

2003年12月19日、韓国に雨水資料館が完成しました。この式典に招待され、12月17日から20日まで松本正毅さんとソウルへ行ってきました。ソウルの気温は常に氷点下の世界。そして顔を刺すような風。東京では体験することのない寒さでした。

韓国の雨水資料館は、新設中学校につくられました。昨年2月、この中学校の李校長先生が墨田区を訪れ、雨水資料館や雨水利用施設、中学校を視察しました。李校長は自分の学校にも雨水資料館をつくりたいと思い、ソウル大学と共同して完成へと漕ぎつけたそうです。雨水資料館は中学校の3階、4階にあります。大きさは2教室ほどです。そこには15世紀から20世紀まで使用された雨量計のモデルが置かれ、その周りに「雨水はどうして大切なのか」「雨水をどのように利用するの」



などが説明されたパネルが置かれています。『やってみよう雨水利用』から抜粋した図版や日本の会議資料なども展示されていました。驚いたのは、この中学校の地下にある4トンの雨水タンクの貯留量が分かるコンピュータシステムがあったことでした。この資料館は、ここの中学生をはじめ韓国の人々に、よりよい水循環のあり方を教えてくれる格好の場だと感じました。

今回この雨水資料館のほか、ソウル大学の雨水利用施設と韓教授の研究室を訪れてきました。

ソウル大学は非常に大きな大学です。歩いて校内を回るだけで半日費やしてしまうのではないかと思います。校内はバスや自動車が走っています。自転車はほとんどありません。大学は24時間開かれており、夜11時過ぎでも校内にバスが走っていました。

このソウル大学構内に約1000人の学生が住む寮が3棟あります。この寮に雨水利用が行われています。

地下に大型の貯留槽があり、コンピュータ制御で管理が行われているそうです。この時期は氷点下であるため、タンク内の水が凍ってしまうのではないかと心配しましたが、それはいいようです。

ソウル大学では、水に関する研究室は「WATER FIRST」と記されています。それは「水は生命にとって欠かせないもの」という意味があるようです。韓国の雨水利用の推進者である韓先生の研究室にももちろんこの表示が



写真
（右上）ソウル市内の様子
（左上）市内の中学校に雨水資料館がオープン
（左下）韓国の雨に関する展示。手前は館内の雨量計

ありました。研究室では学生が勉学に励んでいるのですが、その学生の向学心は私の想像以上でした。彼らは夜中まで研究室にこもって、勉強をするのです。朝彼らに会うと、「1時間しか寝てない」とか、「一睡もしないで論文を書いていた」などというのです。それがいつものことのように話す姿を見ると、私自身羞恥の念に駆られるとともに、日本の学生のあり方を再考させられました。

B I F U R U で 日韓の雨水ネットワークを深めよう

私が韓国に訪れた理由はもう1つありました。それはB I F U R Uプロジェクトの一環で、韓国と日本の若い世代の雨水ネットワークをつくりたいということです。B I F U R Uの「B I」とはハングル語で「雨」、「F U R U」は日本語の「降る」という意味で、韓国と日本の交流をしようというプロジェクトです。

国連、雨水利用を水戦略に！

「都市と水の国連専門家会議」開かれる

「都市と水の国連専門家会議」が2003年12月2日、大津の琵琶湖研究所で開かれました。会議には、IWAはじめ、オーストラリア、アルゼンチン、カナダ、韓国などの学者、研究者が参加しました。2015年までに、発展途上国の人口の50パーセントが都市に住むことになるといわれており、安全な飲料水の確保や水不足、そして洪水の問題が今後ますます深刻になると考えられています。

そこでは、迫り来る都市の水危機へのさまざまな処方箋が議論されました。当会から村瀬事務局長が招待され、都市の持続可能な水戦略としての雨水利用をスピーチしました。会議では、2005年までのアクションプランとして、雨水利用の推進が明記されました。

次回の国際雨水利用会議

インド・ニューデリーで

昨年8月、当会から4人が参加したメキシコの国際雨水利用会議で、次回、第12回国際雨水利用会議を2005年11月にニューデリーで開催することになりました。インドの複数の雨水利用市民団体とWSSCC(水供給と衛生の国際連絡会議)の共催で行われる予定です。インドは、今後世界で最も人口が増加する地域であり、雨水利用の推進が都市でも農村でも求められています。会議の詳細はこれから決まりますが、私たちが、こうした動きとネットワークしながら、積極的に参加していきたいと思えます。

今回ソウル大学の韓教授の学生と会い、お互いの水事情、雨水事情を知ろうということ話をしました。実際に現場へ行き、見て考え、感じることから始めようと、日本の学生が韓国へ行き、韓国の学生もまた日本へ行くことになりました。そして単に日本と韓国だけではなく、中国、そしてアジアへと広げていきたいという思いを共有してきました。

これとは別に今年の4月には北京で日中水フォーラムが行われます。その際ユース水フォーラムを開催しようという運びで日本と中国で動いています。この機会も利用し、中国の学生も一緒に活動していければと考えています。さらに今年の夏には「水」をテーマに日韓学生環境ギャザリングが行われ、韓国から20～30名の学生が東京に来る予定です。そこでも雨水施設への見学を考えています。来年行われる予定の東京雨水国際会議(仮称)ではこれら日本、韓国、中国、そしてアジア各国の学生が集まり、ネットワークを広げ、水問題解決に向けた学生たちの主体的行動を行っていきたくと考えています。(高橋佑司さん)

雨水で自治体と事業者が初めての意見交換

雨水利用をすすめる自治体担当者連絡会では、市民への効果的な周知方法を常に模索していますが、その一方で雨水タンクの情報収集、タンクに対する意見や希望を事業者の方に反映させる機会を求めています。

2003年12月9日に開かれた自治体の職員と雨水タンクの事業者が意見交換会は、「雨水タンクの普及促進を図る」という共通課題を実現するための初めての試みでした。参加自治体は、首都圏を中心に、遠くは福岡県からの参加もあり、全体で27自治体、20事業者、計62名の参加を得ました。

会議では、それぞれが現状を出し合うなかで、自治体側からはタンクの価格、普及・PR、設置スペース、浄化槽転用の問題点などについて意見が出されました。事業者の方からは、トイレへの利用要望や下水道料金の減免措置の問題などについて意見が出されました。時間的制約がある中で、率直で活発な意見交換ができた、と感じています。

今後、国の総合治水対策等の中での雨水利用の取り組みが大きな課題になると思われれますが、そのためにも今回のように自治体と事業者とが知恵を出し合っていくことが求められることでしょう。

(雨水利用を進める自治体担当者連絡会・葛飾区環境課環境保全担当係長 島田智宏さん)



水文化息づく京都から「いのちと自然のこれから」を発信

シンポジウム「東本願寺と市民がともにできること～いのちと自然のこれから～」報告

2003年11月21日、京都の東本願寺で200名余りが参加して上記シンポジウムが開催されました。当会も含め、東本願寺の僧侶、京都の環境団体などから構成する実行委員会が主催しました。4名の問題提起者の始めは、玉光順正氏(真宗大谷派教学研究所長)で、いのちや自然(仏教ではじねんと読む)の過去、未来に責任を持って、これからを生きていくことは、親鸞聖人の教えに通じることであると述べました。次に、明治の御影堂再建時の棟梁の子孫である伊藤延男氏(元東京国立文化財研究所所長)は、伝統建造物は自然と共生したなかに価値があり、その保存には自然環境を保全しなければならないと述べられました。当会事務局長の村瀬誠氏は、これまでのいのちと文化を育み、水循環を支えてきた大切な雨を余りにも疎んじてきたのではないかと心配されている今世紀に、東本願寺から雨

の意識革命を図り、”No more tanks for war,tanks for peace”と雨から平和を望むことを述べました。最後に、板倉誠氏(京都精華大学人文学部環境社会学科助教授)は、事前に東本願寺と渉成園の水質や生物を調査した結果を発表し、琵琶湖疎水でつながっている渉成園の池で琵琶湖と同じ外来種がいることなどを報告しました。

続いて、酒井彰氏(日本下水文化研究会代表・流通科学大学教授)をコーディネーターとして、4名の発言者、会場との自由討論が行われました。

京都駅前の広大な敷地に、緑や池、そして世界一の木造建築物を擁する東本願寺の価値を、京都1200年の水文化も含め地域と東本願寺がともに考えていき、「京都の水循環の再生」、「地域のコミュニティの核」として将来につなげていくことを期待したいと思います。

(東本願寺市民プロジェクト)



響き合う言葉、巡り合う言葉

- シンポジウム「東本願寺と市民がともにできること」に参加して -

東本願寺で市民とともに環境問題をテーマにしたシンポジウムが開催されると聞いて、仏教では自然や環境をどのようにとらえているのか知りたくて参加しました。私自身を振り返ってみると、西欧の科学から借りた知識で環境を語り、自然を考え、社会現象を知ることが当たり前ようになっていて、そのことに疑問を感じていた背景があります。また、自前の自然観をまだ持ち得ていないという気持ちもありました。

ここでは、玉光順正さんの提起「いのちと自然のこれから 親鸞聖人の教えから」の概要を紹介したいと思います。玉光さんの問題提起だけでなく、シンポジウム全体の印象をひとことと言うと、琴線にふれる様々な言葉が共鳴し響き合った2時間半でした。

玉光さんは、「いのち」「自然」「これから」についてひとつひとつ説明してくれました。

「いのち」に関しては、衆生という言葉が仏教にあります。これは人間だけでなく生きとし生けるものすべてを包み込んだ言葉ですが、今は失われてしまっています。人と生きものを死に追いやった水俣病を思い浮かべれば、衆生という言葉とともに失われた世界があることがわかるでしょう。「自然」について、親鸞の言葉に「自然法爾(じねんほうに)」があります。ここでの自然(じねん)は、西欧の“ネイチャー”とは違って、

もののありようであり、「おのずからそうであること」を言います。過去と未来の二つの方面から現在を考えると「これから」の意味がわかってきます。過去のことには責任を持ち、未来の世代にも責任を果たしながら、今を生きることが大切です。つまり「これから」とは「今」のことなのです。

ほかにも鍵になる言葉がありました。浄土真宗は浄土に対しこの世を「穢土(えど)として見ることから始まります。金や暴力が支配する世界が穢土です。「縁起」という言葉もあります。この言葉の説明にはベトナムの詩人の詩、「詩人は一枚の紙に雲を見ます」が紹介されました。「この一枚の紙には時間、空間、地球、雨、土壌、鉱物、太陽の光、雲、川...すべてのものが存在しています。」から始まり、「木工所へ木を運んだ樵を見ることができます...」とつづくこの詩は、一枚の紙はこの紙以外のすべてのものから成り立っている、という縁起の意味を端的に表現しています。

私には、すべてのものを結びつける縁起という言葉がとりわけ印象に残りました。環境問題を考える際に忘れてはならない視点だとも思いました。様々な言葉が自立していながら互いに呼応し、巡り合う、そうしたことを仏教の言葉の数々から知ることができた講演でした。

(長尾愛一郎さん)

風

コーナー

晩秋の京都“時雨虹”も歓迎！

あまみず公開セミナーフィールドワーク
「京都の水文化を訪ねて」報告

名所・旧跡巡りとはひと味違う“京都再発見”の散策でした。11月22日、総勢11名が訪ねたコースは、琵琶湖疎水記念館、下鴨神社・糺(ただす)の森、工房での絞り染め体験、造り酒屋訪問と盛り沢山。

明治期に東京遷都で沈滞した京都の活性化を図って造られた琵琶湖疎水は、百年以上経た現在でも京都市民に貴重な水を届けています。それを伝える疎水記念館は当時の気概を感じさせてくれました。

賀茂川と高野川の合流地点にある歴史ある下鴨神社・糺の森は、京都の水の原点であり現在も貴重な市民の憩いの場です。感激もありました。糺の森で京都の風物詩“北山しぐれ”に出会い、午前の太陽がその時雨に光をあて“時雨虹”を北の低い空にかけて、我々を歓迎してくれました。

お座敷での京料理の昼食のあと、急遽句会となり、消化に悪いとの向きも。多くの地下水を利用する絞り染め体験工房では、思いがけず(冷や汗のする思い!)絞り染めのハンカチを作り、造り酒屋では京の井戸水を味わいました。いやお酒や地ビールもです。

メンバーの名句?をいくつか披露。「秋の京ぎんなんひろってかぐわしき」斎院の往時をしのが北山しぐれ」「地下水の盆まではるか北時雨」照り降りし糺ノ森の時雨虹」
(平沼洋司さん)



(左)絞り染め工房で地下水の話は聞かずに、手先に神経が行ってちょっと耳の方がおろそかに...

(右)1年中一定した水温である井戸水は染物にはかかせない

雨と文芸に取り組む

昨年6月の初回から早6ヶ月、呼びかけ人の熱い思いに共鳴して私も発足に参加し、毎回参加者6~8名で、楽しく話し合っていました。

第1回の集まりでは、取り上げるテーマについてフリートーキング、第2回は、「5年を目安に資料集を作る」、「1年目は各自得意な項目の資料を集める」を決め、第3回は「友人紹介や各自の分担を決め次回に持ち寄る」とし、ファイルを作成しました。

フリートーキングで取り上げた項目は、水神、雨乞い、水琴窟、文学や芸術の土台となった風土や言葉、さらに雨と小説(以下「雨と」は略す)、短歌(和歌)、俳句、映画、Jポップ・フォークソングなどの現代音楽、民謡、浮世絵などです。



どのテーマも、素人の集まりなので前途多難です。会員の方々のご支援をぜひお願い致します。

現在の資料集めの様子を少しお知らせしますと、小説分野では、まず図書館で雨に関する小説を片っ端から借り出し、また、入手可能な文庫本などを新本、古本と集めました(現在数74冊)。このなかで気づいたことが幾つかあります。時代小説には雨に関する題名が多い(藤沢周平、山本周五郎など)。現代作家も分野を問わず雨を題名に使っている(立松和平、半村良、川端康成など)。新人の作品を含む推理小説にも意外と雨が出てくるなどです。

これらの作品録を今、コラムを交えながら「雨の図書館-文学編」としてまとめています。

次に雨と短歌についてですが、俳句のような歳時記がないので、全集の短歌編などから抜き出してA4版182ページに及ぶ雨の歌集を作ったところです。個人の歌集には当たっていませんので、まだ不十分と思いますが、次回の集まりに持参し、活用を話し合う予定です。
(大庭克世さん)



募集!

2003年度 第4回 あまみず公開セミナー

モンスーンはどうして起こる?**-日本の梅雨のルーツを探る**

日本の雨の代表である梅雨は、インド洋からのモンスーンの風がヒマラヤ山脈にぶつかってやってくるといわれます。なぜその風が日本までやってきて長い梅雨となるのか。他のモンスーンアジア地域とどう違うのかなど、広く、深く雨について知りたい。そのような好奇心から気象キャスターである平井信行さんをお招きして、アカデミックな内容をやさしく語っていただきます。参加ご希望の方は、2月20日までに事務局へFAXまたはEメールで申し込んでください。

(あまみず公開セミナープロジェクトチーム)

日時：2004年2月28日(土)

午後1時30分から4時頃まで

場所：神田学士会館 306号室

電話 03-3292-5936

交通：地下鉄「神保町」A9出口を出てすぐ、「竹橋」徒歩5分、JR「御茶ノ水」徒歩12分

講師：平井信行さん

(元NHK気象キャスター・気象予報士)

会費：(会員)1000円、(非会員)1500円

事務局から
お願い

今回から会報を電子メール配信します。ご希望の方は随時、事務局へお知らせください。

2003年度の会費をまだ納めていない会員には、この会報といっしょに郵便振替用紙を同封しますので、納入をよろしくお願ひします。なお、会報を電子メールで配信する会員には別途、振込用紙を郵送します。

事務局
メンバーが
新しくなりました



今年より事務局員が3人になりました。また連絡先として新たに事務局の電子メールを設定しました。月曜日は高橋、水曜日は桐畑、金曜日は若田が担当し、午後2時より5時まで開いております。雨水に関する疑問、質問などがありましたら、電話、FAX、電子メール、どの方法でもお気軽にご連絡ください。まだ慣れていない点多々ありますが、頑張りますのでどうぞよろしくお願ひいたします。

雨水市民の会事務局：電話 03(3611)0573

FAX 03(3611)0574

専用電子メール office@skywater.jp

月 曜日を担当する高橋佑司です。明治学院大学経済学部部に所属しております。私が雨水に興味を持ったのは、隅田川をきれいな川にしたいという思いからです。都市の川をきれいにするためには下水道の越流水問題がある。しかしその問題の根幹には目の前に降る雨を嫌って、その恵みを活かすことのない人間自身の問題があるのではと考えました。「原点は雨!」と感じております。まして、雨水利用の先進地である墨田区に生まれ育ったことは大きなきっかけです。雨水について事務局で勉強するとともに、実際に学生の視点から水問題解決のための行動を行っていきたいと考えております。

金 曜担当の若田繁子と申します。初めまして。この会には糸賀さんを通して、時々参加していました。村瀬さんの国技館のお話を聞いたり、沖縄市で開かれたイベントにもちょうど主人が宜野湾市に住んでいたの、参加させていただきました。最近では、あまみず公開セミナー「平安の気象予報士 紫式部 - 雨と源氏物語」の講演会が印象に残っています。講師の気象予報士、石井和子さんの視点の面白さにただただ感心して帰ってきました。そんな折声をかけていただきました。長い間専業主婦をしていましたので、何かと不慣れで、ちょっと不安を抱えている私ですが、どうぞよろしくお願ひいたします。